

# しあわせへの道

私の体験を通して

鈴木慈学

# しあわせへの道 みち 序文 じよぶん

この書を著わすについて、過去を顧りみて

鈴木慈学 すずき じがく

私が仏教に身を投じたことは、過去の深い因縁と思ひます。私が十三歳の春を迎へた正月元旦の朝、食膳についた時、母は毎年のことながら私共兄弟五人に一言ずつ教訓がありますが、その時私に対して母は、「お前も今日から十三歳になった（満十一歳と六日目でした）。将来のことも思うでしょう。人の寿命は図られぬ。一歳の人も百歳の人も同じ年と思わねばならぬ。もし死んでから広い道を行ったら地獄ですよ」と言われました。

私は「それでは極楽へ行く道は」と尋ねますと、「極楽の道は茨が一面に生ひ茂つて、その上触つても死ぬような恐ろしい毒草が生えており、大きな岩がそびえ立ち、通ることは出来ません」と言われました。そこで私は「誰がそんな悪い道にしたか」

と問といました。それは「誰だれひとりひとりも通とらぬから自然しぜんにそうなった」との答こたえでした。その時とき私は満まん十一歳さいの子供こどもでしたが、何なんとかして未み来らいに生うまれる所ところを知しつてから死しにたいいと考かんえ、仏壇ぶつだんからお経きやうを出だして見みましたが、漢文かんぶんでさっぱり分わかりません。訓くん讀やくして見みようと、送おくり仮名がなを頼たよりとしてやみつて見みましたが、小学しょうがく四年ねんを卒業そつぎやうの頭あたまでは非ひ常じやうにむつかしいことでした。それでも自じ分ぶんの未み来らいの生し死しを知しりたい一念いちねんでした。ただ今いま考かんえて見みると、生し死じの一大事いちだいじを解かい決けつせんとする修しゆ行ぎやうが、その時とき始はじまつつていたののでした。

当時とうじ「一大事いちだいじ」などと、そんなな深ふかいことは知しりませんが、とにかくお経きやうを日に本文ほんぶんに訳やくすることと、お経きやうの意い味みを知しることに眠ねむりを惜おしんで無む理りな勉べん強きやうを続つづけました。私わたしの家いえでは午ご後ご十時じ乃至し十一時じまで夜よなべ仕し事ごとがあり、仕し事ごとを終おえると三さん十分ぶん以上いじやう一時間じかん程ほどは、疲つかれていても何なにが何なんでも休やすまず、たくさんの経きやう文もんも調しらべました。そしてその後のちには、諸宗しよしゆの僧そう侶りよと問もん答たうもするようになりました。諸宗しよしゆの祖そ師しの遺い文ぶんも読よみましたが、日蓮にちれん聖しやう人にんの遺い文ぶんが一番いちばん好きすきでした。法華ほけ経きやうは釈尊しやくそんが心こころの底ぞこを打うち明あけて、即身そくしん成じやう仏ぶつの秘法ひほうをわれわれに示しめされた法ほうということも分わかりました。

考かえて見みると釈しやく尊そんの説せつ法ぽうは大たい別べつして三さん段だんになつておりまます。経きやう文もんには初はつめ四し諦たいの法ぽう  
「苦く・集じふ・滅めつ・道どう」を説とき、中ちゆう間かん十じふ二に因いん縁えんの法ぽう「無む明めい・行ぎやう・識しき・名な色しき・六ろく入にゅう・触そく  
・受じゆ・愛あい・取しゆ・有う・生しやう・老らう死し」を説とき、最さい後ごに菩ぼ薩さつのたためめに六ろく波は羅ら蜜みつの法ぽう「布ふ施せ・持じ  
戒かい・忍にん辱じやく・精しやう進しん・禪ぜん定じやう・仏ぶつ智ち」を説とくと仰おほせられ、順じゆん序じよを定さだめてわれわれを教きやう化けされ  
た有あり様さまは、手てに取とる如ごとく分わかりまます。ししかしなながら六ろく波は羅ら蜜みつとは、俗ぞくに菩ぼ薩さつ行ぎやうと言いつて  
おり、専せん門もん家かの僧そう侶りよでさえ行ぎやうななつておおららぬぬののだだかから、私わたくし共どもは凡ほん夫ぶであるるから菩ぼ薩さつ行ぎやうは  
出で来きなないいだだららううと思おもいまましたた。ととううととうう行いきき止とまりりととなり、成じやう仏ぶつの道みちは塞ふさががつつてしま  
いまましたた。

私わたくしは大たい正しやう十じふ二に年ねん、四し十じふ二に歳さいの時とき現げん在ざいの法ほう音おん寺じ（日に本ほん福ふく社しゃ大だい学がく、立た花はな高こう等とう学がく校こう、養やう護ご  
施せ設せつ、精せい薄はく施せ設せつ等とう八はち事じ業ぎやうを管いんんでいる）の前ぜん身しんたる仏ぶつ教きやう感かん化け救きう濟さい会かいを尋たずねねまましたた。そ  
の時ときの会かい長ちやうでああつた杉すぎ山やま先せん生せいと一いち問もん一いつ答たふを交かわしまましたたが、先せん生せいの申もうさされるるには、「菩ぼ  
薩さつ行ぎやうはわわれれわわれ凡ほん夫ぶがが行ぎやうううものので、いいくら強つよくも、走はしるるここが早はやくも、象ぞうや馬うまで  
は出で来きまませせん。お釈しやく迦か様さまでも阿あ弥み陀だ様さまでも凡ほん夫ぶから仏ぼんに成なつた人ひとですすよ」と言いわれま

した。私はたくさんのお経が読んでありましたから、お釈迦様は過去の世に雪山童子となり、檀王という王様の時の荒行、又、常不輕菩薩となつて修行された有様等、たくさん説かれてあることを知っております。阿弥陀様も過去に法蔵菩薩として不可思議劫という長い間修行され、法華經の座にては常に樂つて妙法蓮華經を説き、即身成仏を遂げ、西方安樂世界を教化する仏となられた由、經文にも明らかです。しかしこれは私が思ったこと。先生はなお言葉をついで、「あなた何を間違えていらつしやる。ただお経を読んだだけ、知つただけで何が出来ますか。譬えば世界地図を見て世界を知つたと思つていると同じです。一つ貿易をやつてご覧なさい。何も出来ないでしよう。その年輩まで勉強して何一つ得るものは無かつたでしよう。お氣の毒でしたね」と言われてビックリ仰天。はつとわれに帰り、「この先生は三明六神通に達した方に違ひない」と思いました。

それから一か月二回位は必ずお話を聞き、仏教に基盤を置いた社会学に励むことにしました。心の奥底から善悪を見分ける修養、病氣に対する生理衛生、薬の効能、

ならびに副作用による悪影響などを研究しつつ、又は店頭にてお客様に接する態度と  
言葉の使い方、仕事をする時の心構え、嫌な仕事も喜んで働けるよう覚えること。島  
では害虫を国土成仏させて増収を図り、道を通る時は人の邪魔にならぬよう歩くこと。  
又、自転車の時もその通り気をつけ、親に接する時は無理なことでもニコニコ顔で聞  
いて上げること。後で機嫌のよい時話せば快く聞いてくれます。妻や子、嫁や孫に対  
しても、一口の言葉、あるいは態度についても、後の影響の趣く所を考えて行動する  
ことに努力しました。

追々よい結果が生まれて参ります。ここに意義ある一日を送り、一生を通じて感謝  
の生活を営む自信を得ましたので、一生をこの修養に尽し、体得した経験によって悩  
める者の伴侶となり、又、他の人の修行の一助とならんことを誓願として、励みつつ  
あります。一言述べて序文と致します。

昭和二十七年九月

續ぞく しあわせへの道みち 発刊はっかんの辞じ

顯けん 修しゅう 院いん 日にっ 達たつ

泰岳院日芳上人一周忌に当り、上人の遺稿を刊行することとなった。この書物は、好評を博した前作「しあわせへの道」(昭和三十七年十月刊)以後、書き残されたものを編集したものである。

上人の人柄は、一口に言つて嚴格であり、道理に通じた方であつたが、しかしその説かれるところは、前作「しあわせへの道」にあらわれているように、永い間の法華經布教教化の生活の中から体験的に得られたものを、仏法の立場から平易に、わかりやすく説かれたものである。日常の生活の機微にふれて説かれる話は、だれの心にも抵抗なく入りこんでくるのである。

前作を發行される時、その題目を「読めばわかる、としてくれ」と言われたが、

「それでは本の題目として少しおかしいですよ」ということで「しあわせへの道―私の体験を通して」ということにした。しかし、題目はどうあれ上人の意図された精神は、この書物に接する人をして仏道のいかなるかを「読めばわかる」境遇におかれようと言われたところにある。八十余歳の生涯を本書の中にうかがうことができるのである。

願わくば、この冊子を読み、人から人へ読みつがれる展転の功德により一人でも多くの人が法華経の流れに入り、その「しあわせへの道」を増進されることを願うものである。

昭和四十一年三月



続ぞくしあわせへの道みち 序文じよぶん

日本の国にほんくにに仏教ぶつぎょうが渡りしより約千五百年やくせんひゃくねん、高僧こうそう碩学せきがくもたくさん輩出はいしゅつされたれども、本尊ほんぞんに迷まよい、あるいは阿彌陀仏あみだぶつを本尊ほんぞんとし、あるいは大日如来だいにちにやらいを本尊ほんぞんとし、あるいは観音かんのん・勢至せいしを崇あがめ、もとより仏ほとけは釈迦しやくか一仏いちぶつであります。たまたま釈迦牟尼しやくかむにを本尊ほんぞんとしながら大般若經だいはんんにやきょうを依經えきょうとし、宗是しゅうぜに「不立文字ふりつうもんじ・教外別伝きょうげべつでん」などと、涅槃經ねはんぎょうの依經えきょう法不依人ほうふえにんの誠文かいもんに違背いはいしております。法ほうに依よつて人ひとに依よらざれとは、古言こげんの「大薩埵だいさつた法ほう文ぶん説せき給たまうとも、經文きょうもんを手てに取とらずば用もちいざれ」と嚴きびしく戒いましめてあります。これ等の高僧こうどうら等は、師懈怠しけたいの罪輕つみかるからず、無量劫むりょうごう、阿鼻地獄あびじごくは經文きょうもんに照てらして明あきらかであります。また經文きょうもんに迷まようとは、あるいは淨土じょうどの三部經ぶきょうを依經えきょうとし、大日經だいにちきょう、涅槃經ねはんぎょうを依經えきょうとし、大般若經だいはんんにやきょうを依經えきょうとし、無量義經むりょうぎきょうの「四十余年しじゅうよねんには未いまだ眞実しんじつを顕あらわさず」の誠かい文ぶんに迷まよう者ものにして、信者しんじや檀越だんのつを無間地獄むけんじごくへ追おいやる大惡人だいくにんになり果はてぬ。また中興ちゅうこうに日蓮聖人にちれんしょうにん御出現ごしゅつげんになり、諸宗しよしゅうの迷まよいを是正せせいせんと、四箇しかの格言かくげん、念仏無間ねんぶつむけん・禪天魔ぜんてんま・

真言亡国・律国賊と四箇の玄題をかかげて、諸宗の違目を責められしかば、諸宗の僧侶雲の如く起り、身命に及ぶ大難四度、その他の小難数知れず。一生涯を無数の大小難に明け暮れされました。また近年には仏教の大学者、遠く印度の国まで出かけ、お釈迦様の遺跡までも実地踏破し、印度哲学の大家もたくさん出られましたが、その見解に曰く「観音様や阿弥陀様や薬師如来はお釈迦様の舌から生まれた仏様で、架空の仏様である」と。我々信者から、大切なる仏に成る教えをうばい取る悪人です。なぜかと申しますと、我々が観世音菩薩普門品を修行すると、仏に成ります。「念彼観音力」とは、私共が徳を積んで、人を助ける働きの事であります。たとえば、御先祖様を地獄から救い出すのも同様であります。薬師様は、毒を薬にする仏様です。日々我々が励んでおる貪・瞋・痴の三毒を、慈悲・至誠・堪忍の三徳を行なうように教化善導して下さる仏様です。それは私共の為さねばならぬ仕事です。私共の毎日の修行です。その教えを蔑ろにし、表面上の形のみを仏の姿として拜んでおって信心などと思つているのは、何とも言いようのない愚か者です。一日も早く確かな信仰を確立して、

自他共に後生善処の理想郷を建設して下さいませ。これを極楽と申すのです。これは私の言葉ではありません。日本中の諸人が一直線に極楽に到達する高速道路です。その中に、たくさんの迷路が仕掛けてあります。その罠にかからぬよう、気をつけて下さいませ。これは日本人一人残らず聞いて頂きたいと思えます。

昭和四十年二月

不省沙門 慈学 謹んで記す

# しあわせへの道・合本 目次

第一章 信と行……………1

誠は、あらゆる道徳の根元なり……………3

仏教より見たる道徳観念……………9

仏教より観察したお伽話……………32

門 松……………42

除夜の鐘……………47

養老の滝……………51

良い子のお母さんの心得……………55

家庭は小さい有限会社です……………59

麴提波羅蜜……………76

長者三代続かず……………79

第二章 菩薩と仏……………85

福の神……………87

## 第三章

目連尊者	97
觀世音菩薩	106
美師如來	113
阿彌陀如來	123
般若心經	128
いかになすべきか	133
到彼岸	135
三参拝	146
結婚式	154
懺悔と慚愧	163
四善根	175
平等不平等	181
毒鼓と毒舌	188
尸伽羅越六方礼經	198
母の十恩	206
七恩の事	211

本尊の奪い合い……………	215
地獄と極楽……………	221

#### 第四章

人生の目標……………	227
------------	-----

三冥土の形勢……………	229
-------------	-----

仏説箭喻經……………	233
------------	-----

一眼の龜……………	238
-----------	-----

十界五具……………	243
-----------	-----

火宅の譬えと一車三車……………	250
-----------------	-----

自力の信仰と他力の信仰……………	259
------------------	-----

神通力……………	266
----------	-----

法華經序品を拝読して……………	274
-----------------	-----

父母恩重經……………	283
------------	-----

十王讚歎鈔……………	292
------------	-----

#### 附 録

聖徳太子十七条の憲法……………	309
-----------------	-----

第一章

信しん

と

行ぎょう





## 誠まことは、あらゆる道徳どうとくの根元こんげんなり

「誠まこと」という文字もじの意味いみを、われわれに分り易く教おしえて下さくだった孔子様こうしさまの書物しょもつを拜見はいけんして、よく考かんえましよう。「誠まことは天てんの道みちなり。之これを誠まことにするは、人ひとの道みちなり。誠まことは勉つとめずして中あたり、思おもわずして得う」（中庸ちゆうゆう）とあります。天てんの道みちと人ひとの道みちと二筋ふたすじあるのではなく、天てんの道みちを行なう者ものが人ひとで、人ひとの道みちと思おもう者ものは畜生ちくじゆうであると暗あんに教おしえておられると存ぞんじます。何故なぜなれば、多おほくの人は生活せいかつさえ円満えんまんに出来できれば良よいと思おもっております。畜生ちくじゆうは平ひらたく言いえば、食たべてゆかれれば良よいというような考かんえ方かたのようであります。畜生ちくじゆうは自分じぶんが食たべてゆくことと、生いきてゆくことばかり考かんえております。そうなれば人間にんげんも同じおなじで、万物ばんぶつの靈長れいぢゆうと言いい、自分じぶんもそうであると信しんじ切きっていた自分じぶんの心こころの愚おろかさ、恥はずかしさがよく分わかるというものです。次つぎを読よむと、更さらによく分わかります。

「古いにしへの明徳めいとくを天下てんかに明あきらかにせんと欲ほつする者ものは、先まずその国くにを治おさむ。その国くにを治おさめんと欲ほつする者ものは、先まずその家いえを齊ととのふ。その家いえを齊ととのふと欲ほつする者ものは、先まずその身みを修おさむ。

その身を修めんと欲する者は、先ずその心を正しくす。その心を正しくせんと欲する者は、先ずその意を誠にす」(大学)

### 心と意とを分別せよ

心という字は、ああ思ったり、こう思ったり、こう判断したり、どんどん働いておられます。仏教の歌に「心こそ心迷わす心なれ 心にこころ心ゆるすな」とあります。自分では正しいと思っても社会から、又は第三者から見ると随分間違っております。ここに誠の意が必要です。まず、尊い人生を受けたことは尊い使命がある筈です。人は世の中のためになる働きをせねばならぬ、自分の生まれて来たことによつて少しでも世の中を善くして死なねば犬死だ、と考えて尽すのが天の道であり、誠の意です。自分の存在によつて人の進むべき手本となる。この立派な信念が心の奥にチャンと座っていること、これを「誠の意の座」と申します。その誠の座から出て来る心が正しく働き、その心に支配されて身が修まり、その身の修養によつて家が斎い、国の治ま

る道を作ります。

「勉めずして中り」とは、他人の間違つた思想でも、最もらしくよく聞いてやり、意見を十分受け入れてから、後で、世の中のためになるにはどの方法が適切かと、相談するような気持ちを持たせつつ落ち着いて話を進めます。又争い事なれば、相手の心の中を察して相手の面目を立ててやり、自分も損をしない方法を考え出すことに努力すれば、自然と物事の成就する道が開けてまいります。私は小学校の頃数え歌で「心は高く身は低く」と歌っておりました。その時分は少しも分りませんでした。心は高く身は低くとは、世の中を治める智慧の働きのことで、身は低くとは、平常の立居振舞が溫和閑雅で、言葉もいつも低め低めで、家庭や社会を治めてゆくことであります。子供の教育については、今更ながら先師先徳のご慈悲が身に染みて、有難く感ぜられます。これを仏教では、「中道実相」と申します。一切の事柄が円満に治まってまいります。

思わずして得るには

自分<sup>じぶん</sup>は出世<sup>しゅっせ</sup>がしたいとか、偉い人<sup>えらいひと</sup>に成ろうと思わぬにも拘らず、誠<sup>まこと</sup>の意<sup>い</sup>を以<sup>も</sup>つて世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>を治<sup>おさ</sup>めてゆけば、知らぬ間に、あの人<sup>ひと</sup>に相談<sup>そうだん</sup>したら間違<sup>まちが</sup>いなとか、あの人<sup>ひと</sup>に頼<sup>たの</sup>んだらよい智慧<sup>ちえ</sup>が貸<sup>か</sup>して貰<sup>もら</sup>えるだろうと、知らぬ間に社会<sup>しゃかい</sup>の指導<sup>しどう</sup>者<sup>しや</sup>になります。世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>の親<sup>おや</sup>となる方々<sup>かたがた</sup>は、誠<sup>まこと</sup>の意<sup>い</sup>をいつも持ち続け、わが子<sup>こ</sup>に知らず知らずの間にわが身<sup>み</sup>の行<sup>おこな</sup>いを示<sup>しめ</sup>しつつ、誠<sup>まこと</sup>の意<sup>い</sup>を植<sup>う</sup>えつける工夫<sup>くふう</sup>こそ、子孫<sup>しそん</sup>繁榮<sup>はんえい</sup>の基<sup>もと</sup>であります。又教育<sup>またきょういく</sup>者<sup>しや</sup>の皆様<sup>みなさま</sup>方<sup>がた</sup>にもお願い<sup>ねが</sup>いしたいのであります。生徒<sup>せいと</sup>や子弟<sup>してい</sup>には誠<sup>まこと</sup>の意<sup>い</sup>を植<sup>う</sup>えつけて、将来<sup>らいかてい</sup>家庭<sup>かいてい</sup>のためになり、社会<sup>しゃかい</sup>に貢献<sup>こうけん</sup>する人<sup>ひと</sup>を育て上げようと努力<sup>どりょく</sup>して下さるのは、取りも直<sup>なお</sup>さず誠<sup>まこと</sup>の意<sup>い</sup>の持主<sup>もちぬし</sup>であります。自分<sup>じぶん</sup>の家庭<sup>かいてい</sup>も幸福<sup>こうふく</sup>となります。

古歌<sup>こか</sup>に「心<sup>こころ</sup>だに誠<sup>まこと</sup>の道<sup>みち</sup>にかないなば 祈<sup>いの</sup>らずとても神<sup>かみ</sup>や守<sup>まも</sup>らむ」とあります。よく味<sup>あじ</sup>わって下さいます。

## 国家泰平の基を作ること

国家泰平、五穀豊穰、万民安楽を願わぬ人はありませんが、どうすると国家が泰平になるでしょう。孔子様の次の言葉を読んで見ましよう。

「物格ものいたつて右知のちちいた至る。知ちいた至いたつて右意のちいよ誠まことなり。意いよ誠まことにして右心のちこころ正ただし。心こころ正ただしくして右身のちみ修おさまる。身み修おさまつて右家のちいえ齊ただう。家いえ齊ただいて右国のくに治おさまる。国くに治おさまつて右天のちてん下か平たらかなり」

(大学)と結んであります。

誠とは、国家の治まる法と、国民を幸福に導くことをいつも心に留め、強い強い信念を持ち続けて少しも揺るがぬ智慧のことであります。これを誠の意と申します。意が誠の座ざにありさえすれば、いつでも誠の座ざから正しい心こころが起おこり、身みが修おさまり、家いえも齊ただい、国くにの治おさまる基もとになります。私共わがらはいつも誠の意いよを持たもちましよう。必ずかならず人格じんかくを高たかめてゆきます。当然とうぜん家庭かていも幸福こつかくになります。

## 仏教の誠とは

仏教の誠は、まだまだ高遠な教えです。煩惱を消滅して凡夫が仏に成る教えであるからです。法華経・如来寿命品で「如来の誠諦の語を信解すべし」と三度び仰せられ、念には念を入れてお説きになったのは、余程大事な教えであることが察せられます。

如来の誠諦の誠の字は誠という字です。仏教の誠は、凡夫を皆悉く仏の境界まで救い上げる智慧と働きです。私共がこの智慧と働きを頂戴すると、私共が又他の人を仏にする働きの出来る者に成れます。この智慧と働きを誠と申します。